

高知県

産地ルポ

ナス

ナス生産量日本一を誇る高知県安芸市の 冬春ナス主力品種「竜馬」登場から40年、 単為結果の「PCお竜」への期待

(編集部)



↑安芸市で40年前「竜馬」ナスの普及に尽力した立仙耕一さん(左)と現社長立仙善久さん(右)。



ナスは高知県を代表する特産野菜で、温暖な気候と豊富な日照量を生かし、ハウス促成栽培(10〜6月)を中心に冬春期には全国一の出荷量を誇ります。主な産地は安芸市、芸西村、安田町、香南市、室戸市、田野町、奈半利町、高知市、大月町、四十万市、南国市、東洋町、土佐市。今回取材した安芸地区で最も生産量が多い品種は「竜馬」。当地での冬春栽培用に色ボケせず、枝吹きを向上させた千両タイプの極早生品種。1978年ごろから導入が開始されて以来、高知出身の幕末のヒーローを冠した名前の通り当地に根付いたロングラン品種となっています。そして40年余りがたつて変化の兆し。単為結果性を持たせた同タイプ新品種「PCお竜」の誕生です。先進的に導入を開始した野町富和さんのグループを訪ねました。

かつては施設キュウリも盛んで、10月にキュウリ栽培終了後、10月から温暖な気候を生かした加温栽培でナスの定植が始まっていたようですが、キュウリの作付けがなくなりナスが前進。現在は8月から定植が始まります。キュウリからナスへの転換当時、「竜馬」ナス推進に尽力されたのは安芸市の立仙種苗店社長の父で会長の立仙耕一さんがまだ40代のころ。タキイのナス育成者と当地の栽培条件に向く、色ボケしない、枝吹きのない早生種の選抜を試行錯誤して、「竜馬」ナスを誕生させました。

冬場に加温する冬春ナスでは、南国高知といえども「低温・低日照」条件化にさらされます。加温ハウスあるいは無加温ハウスでも色つやがよく、秀品率が高く、初期から多収になる極早生の品種として育成されたのが「竜馬」でした。果形は長卵形で首が太くて尻はやや丸みを帯び、75〜90gが収穫の目安です。明石大橋架橋以前は、高知から消費地への流通は時間を要したため、



↑山を切り開いた水田転作が多く、平坦地が少ないものの、海に面した日照量の多い南向きの土地を生かした冬春ナスが盛ん。



↑後列右から野町富和さん、谷山浩一さんと研修中の大上憲一郎さん、小松広幸さん。前列右から岡林幸彦さん、富和さんの母親で現役生産者の野町千賀子さん。

単為結果ナス「PCお竜」のメリットを実感

輸送途上で傷まないよう皮はかため、鮮度落ちしないよう育成されました。草姿は開張性で側枝の発生が極めて旺盛で着果数が多い「竜馬」の登場で高知ナスの増産・販売体制が整い、市場評価は向上し今日に至っています。

安芸市赤野地区で冬春ナスを栽培する野町富和さんのグループは、いち早く「PCお竜」の導入に取り組まれています。導入の理由は「省力化」。これまでは、ホルモン処理の人間から解放されるため、マルハナバチが導入され省力化が図られてきました。しかしマルハナバチと言えども万能ではなく、生きもののゆえの管理には神経を使うもの。花が咲いたらハチの量を安定させるため毎年10a当たり10ケースの巣箱が必要で、また、灰色かびなど病気の発生が予測されても、薬剤による消毒ができません。その点、ハチが不要な単為結果ナスの「PCお竜」ならいざとなればすぐに消毒可能という状態で、精神的に楽なのだとか。

グループの一人岡林幸彦さん（おがのしんけん）の場合、はさらに深刻で、ハチのアナフィラキシーショックがあり、命がけでした。「一旦、単為結果のよさを知ればもう戻れない」と皆さん実感されています。

「PCお竜」の栽培性は？

単為結果ナスの利点は大いにありますが、「PCお竜」が選ばれたのは「果形のよさ」にあるといいます。「竜馬」との管理の違いをあげていただきました。

「PCお竜」のよい点として、①冬場でも果形が狂わず安定。収穫の波がなく収量が安定している。②一つわき芽が出てからは次々芽吹き、着果の間隔が「竜馬」より「PCお竜」の回転が早い。

③単為結果品種なので石ナスやボケナスの発生はなし。夏に花が落ちず、日焼けに強い印象。

逆に違いを感じる点として、わき芽の吹き方は「竜馬」より大人しく、草勢が弱まると回復しにくいので台木は強勢の「トナシム」を使っている。また、冬場の花柄の抜けが悪く、3月くらいの温度上昇期（3月梅雨）に灰色かび病がやすい。

また、かつて長時間の輸送に対応したため果皮は、「PCお竜」では現代人に好まれるやわらかい果皮に変わりました。収量面ではトータルでは変わりません。むしろハチの管理やホルモン処理から解放される時間を花柄の処理や、病害予防などほかの管理作業に回せます。単為結果のメリットを生かして作付増や面積増、品質向上につながってくると思われます。

長く地元根付く品種に

40数年前、当地で「竜馬」ナス普及に尽力された、地元安芸市の立仙種苗店会長の耕一さんは、「PCお竜」の導入について、「キュウリから長期一作の促成ナスへ、移動式ハウスから固定式加温ハウスへ、自家育苗から購入苗へと産地は変化してきました。そして今、高齢化と面積拡大に対応した省力化のためには単為結果ナスの導入は進めるべきだと思います」と時代の流れに欠かせないものと、「PCお竜」への期待を話されました。

1979年に誕生した「竜馬」が当地の郷土品種として根付いたように、これからは「PCお竜」と二人三脚で高知のナスを全国に届けていってほしい。



↑長年栽培してきた「竜馬」の芽吹き方との違いを説明する千賀子さん。